こういったことから当地域の畑作物としては，桑が最も適しているのである。第二に以上のような事情のもとでは農業経営として養蚕が最も有利であり，従って養蚕収入が農家経済上確固たる地位を占有していることである。第三に養蚕が水稲作との複合経営や中小家畜あるいは冬作野菜などとの複合経営で，年間の労働配分上，さらに土地・施設・肥料などの面で互いに補完的作用を現実に果していることである。

当地域の経営形態は大別して①米麦・養蚕，②米麦・養蚕・野菜，③米麦・養蚕・家畜の3種類であるが，それぞれ労働配分はうまく行っている。特に②でニラ等の野菜を取り入れている農家では，冬の農閑期が全くなくなり，年間の労働の均等配分がなされている。第四には養蚕が技術的にも経営的にも農家自身の経営と知恵との上に成り立っており，いわゆる付け焼き刃でない底力をもって発展してきたということである。

伊豆半島西海岸
北部臨海村の地理学的研究

久保田　雅　子

本論文は，調査地域（伊豆半島西海岸北部臨海村）における産業の明確な地域差に留意し，地域を地形との関連において分類，比較し，更にこの地域差の生じた要因について漁業発達史を通じて考察したものである。以下論文の順序に従いこれを要約する。

調査地域の地形は，地質・傾斜・海岸線の状態等により大まかに次の3地域に区分できる。

A地区　第三紀火山岩におおわれる山地

B地区　第四紀火山の北側斜面

C地区　第四紀火山の西側斜面

この，A，B，C地区はそれぞれ行政区画の内浦・西浦・戸田の三地域にほぼ一致する。従って地形との関連の下に，この3地域の主産業である漁業とみかん業について比較した結果，次のように著しく性格の異なることがわかった。

内浦地区：急斜面が多いためみかん園の分布が比較的少ない。従って兼業農家が多いが，その多くが養殖業を主とする沿岸漁業との兼業であり，半農半漁村的性格が強い。

西浦地区：広大な緩斜地を有するためみかん園が広く分布しており，みかん栽培業が専業的におこなわれている。現在，村民のほとんどが漁協組合員であるが，漁業を営まない。純農村的性格をもつ。

戸田地区：全体として漁村的性格が強いが，戸田港周辺の漁業集落と山麓の農業集落とかなり明確に分化している。農業は急斜面が多くみかん園の分布が少ないので，専業とできない。漁業は遠洋漁業を主として非常に活発におこなわれ，専業漁家が多い。

これを発達史的にみると，封建時代には三地域いづれも村張的な立網漁業を中心に沿岸漁業を営む半農半漁村としてかなり類似した性格をもっていた。

明治時代に入ると全国的な漁業の大変革期をむかえたが，これに対応して調査地域の漁村は異っ方向に変貌していった。

まず，沿岸漁場にめぐまれぬため沖合漁業の素地であった戸田村は明治末期の動力漁船導入を契機に沖合漁業に進出した。

これに対し内浦・西浦は立網漁業に好適な自然条件をもち，沖合漁業の技術を有さなかったのでみかん業を導入し陸地に後退することにより漁業の行づまりをのりこえた。みかん業との兼業に支えられて沿岸漁業が維持されたが，みかん業に対しめぐまれた地形条件をもつ西浦は次第に漁業は副業化したのに対し，地形的に不利な内浦では依然として漁業を主業とせざるを得なかった。

第２次大戦以後，３地域の地域差は更に明確なものとなった。

戸田は戦後遠洋漁業がめざましく勃興し，県下有数の遠洋漁業地にまで発展した。

内浦はは浅海養殖業が創始され，ここ数年著しく発展し，内浦の漁業の主体となっている。

西浦は戦後ほとんどの漁協組合員は海岸をはなれ，みかん園の拡大に力を入れ，みかん業の専業化が進んでいる。

江戸川デルタ南部の地理学的研究

― 主に土地利用変化からみた地域性の考察 ―

栗　原　尚　子

第一章　概　説
　１節　自然的概説
　　1.微地形　2.地質　3.気候
　２節　人文的概説
　３節　地理的位置
第二章　土地利用の変化および地域性
　１節　江戸川区地域（１－４期）
　２節　行徳地域
第三章　災　害
　１節　風水害
　２節　地盤沈下
　３節　塩　害
第四章　要　約